一九一四年と一九一五年にマルクス主義の蛇の頭を断固として踏みつぶすところまで進まなかったことは、一九一八年に血みどろの復讐となったのであるが、それと同じように一九二三年の売国奴と民族虐殺者の行為を最後的に終らせる機会をとらえなかったことも、を受けないではすまなかった。

マルクシズムとの怠慢な決算　フランスにほんとうに抵抗しようと考えるものが、五年前に戦場でのドイツの抵抗を内側から破滅させた諸勢力に、闘争をいどまなかったとしたらそんな考えはすべてまったくのナンセンスだった。ただブルジョア階級の人間だけしか次のようなとてつもない考えをもつことはできなかった。つまりマルクシズムは現在ではおそらく以前とは違った性格のものになっているだろうとか、一九一八年のゲスな指導者のできそこないどもはより上手に政府の各種のポストにはい上るために、その当時二百万の死者を冷淡に踏み台に使ったのだが、そのかれらが一九二三年の現在、国民の道徳意識に対して突然かれらのみつぎ物をささげる覚悟になっているかも知れないといった考えである。以前売国奴だったものが突然ドイツの自由のための闘士になるかも知れぬなどという希望はありうるはずのない、実にナンセンスな考えである。かれらはちっともそんなことを考えてはいなかったのだ！　ハイエナが腐肉から少しも離れることがないと同じように、マルクス主義者は祖国を売る仕事を見限ることはない。そうはいってもかつて、あんなに多くの労働者がドイツのために血を流したのではないか、などというこの上もなくばかげた異論には後生だからかかわらないでほしい。そうだ、ドイツの労働者はたしかに血